

新版画 進化系 UKIYO-E の美

千葉市美術館 22.09.14~11.03

「新版画」は、明治30年前後から昭和時代に描かれた木版画のことで、版元を中心として従来の浮世絵版画と同様に、絵師、彫師、摺師による分業により制作されて、浮世絵の近代化復興を目指し数多くの木版画が描かれた。

本展は、千葉市美術館が誇る新版画コレクションから、その歴史を通覧するもので、新版画の成立から発展型への歴史を「約190点」の作品でたどる。

展示品は、橋口五葉《化粧の女》や伊東深水《対鏡》の最初期の名作から、川瀬巴水《谷中の夕映》、吉田博《大原海岸》から、昭和初期のモガ（モダン・ガール）を鮮烈に描いた小早川清のシリーズ《近代時世粧》に至る。

昨年から東京・大阪・山口を巡回した展覧会は、最終展観となる千葉会場では、新版画の先駆ともいえるべき、明治末期に来日して日本の職人と共に木版画を制作したアメリカ人女性「ヘレン・ハイド」と「バーサ・ラム」の作品「約50点」が展示されていることは誠に興味深いことである。

展示品は、美人・風景・役者各ジャンル花形作家たちの競演を、伝統技術の粋と革新的な表現のきらびやかな融合を楽しめる内容である。

エリザベス・キース（英国の女性）《藍と白》1925（大正14）年 下図左

古物商の暖簾と捲り上げた日除け幕、出入りの植木屋と思しき若者の法衣と前掛けと鉢巻、若者と会話でもしているような女性客の着物と帯、さした和日傘と手に持つ扇子、そして朝顔の鉢につる棒に括りつける紐、二人の履物の鼻緒までが“藍と白の組み合わせ”で、西洋らしき色彩感覚が伺える。



橋口五葉《化粧の女》
1918（大正7）年

川瀬巴水《谷中の夕映》
1921（大正10）年